

# 「軽度」発達障害を 考える

「軽度」発達障害の  
位置づけと頻度

\*発達障害者支援法が成立し、全国各県に発達障害者支援センターが設置されつつあります。一連の動きの中で、「発達障害」「軽度発達障害」という言葉が社会の中で知られてきました。さて「軽度」発達障害とは何を指すのでしょうか？頻度はどれ位でしょうか？「軽度」発達障害は、高機能広汎性発達障害（知的障害のない自閉症スペクトラム）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、発達性協調運動障害（いわゆる不器用）、軽度・境界域の知的障害の五つの障害の総称としてとらえたもので、医療介護度の高い重症心身障害に比し、脳機能障害が軽い発達障害の総称として使われたとのことです。それぞれは医学界では診断名で

ですが、お子さんを理解するためのキーワードと言いかえることができます。「軽度」と言われていますが、問題が軽度でないことは多々あります。

\*発達障害者支援法 平成十六年度十二月十日法律第一六七号は、自閉症、アスペルガー症候群、ADHD、学習障害などの発達障害を持つ者の援助などについて定めた法律。第九条に「市町村は、放課後児童健全育成事業について、発達障害児の利用の機会を確保を図るため、適切な配慮をするものとする」と記されている。施行と同時に厚生労働省と文部科学省から事務次官通知「発達障害者支援法の施行について」が出され、放課後児童クラブでの適切な配慮、必要な支援を求めている。

これらのキーワードを使うことは、どのようなメリットを私達にもたらしてくれるのでしょうか？最大のものは、これまですっかり認識されていたいなかった子どもの状況が、キーワードを通してやっと認識できるようになった、ということだと思います。これまで、援助すべき対象と捉えられ

ていなかったために、不適切に扱われてきたのです。発達障害がないとされる子どもは、配慮なしに集団の中に入れられても、それなりにうまく育っていきけると言えます。一方軽度発達障害を持つ人々は同じように配慮なしに集団に入れられてしまうと、うまく育っていくことが困難です。周囲が気づかない中で、適切な配慮・援助・支援のない中で、うまくいかない自分を見出しては自信を失っていく、自己評価を下げていくお子さんが少なくないのです。そして「わがまま、なまけている、幼い、自己中心的、親のしつけがなっていない」などと評価され、叱責対象となってしまう時代が到来したといふことです。多くのお子さんからみて若干システムが偏っているであろうADHD、多くのお子さんと一緒にシステムに違う点を持つ自閉症ス

とうじょうめくむ  
**東條 恵** 新潟県はまぐみ小児療育センター 診療部長

小児科、小児神経科、児童精神科の一部を担う。発達障害療育医と自認している。1951年3月8日 柏崎市に生まれる。高田高等学校を卒業。1977年鳥取大学医学部卒業後、東京都の武蔵野赤十字病院で、小児科、麻酔科を研修。1979年国立武蔵療養所（現在の国立精神・神経センター）小児神経科に勤務。1984年新潟県に帰る。県立中央病院、大学病院、国立療養所新潟病院重症児病棟勤務。1988年新潟県はまぐみ小児療育センターに勤務。現在に至る。最近ドクトルJOJOというペンネームで新潟市自閉症親の会のホームページで自閉症スペクトルの方の著書の紹介をさせていただいている。

著書：「発達障害ガイドブック 自閉症スペクトル・広汎性発達障害・高機能自閉症・アスペルガー症候群・ADHD・学習障害 一保護者と保育士・教師・保健師・医師のために」（考古堂書店）、「アスペルガー症候群・自閉症のあなたへ」（考古堂書店）、「自閉症スペクトラムものがたり「心の理論」の不調を知るために」（考古堂書店）

ペクトラム（高機能自閉症、アスペルガー症候群）という子どもがいることに多くの大人達はやっと気づいたのです。これらの子どもに対し「多くの子どもと同じであるはずだ」「多くの子どもの一人として振る舞ってもらわなければ困る」という誤解・強制をすべきでないともいえます。

軽度発達障害は  
病気でしようか？

使われている言葉は医学用語です。今後も教育界そして一般社会の中に浸透していくでしょう。医学用語ですが、病氣と認識することが妥当でしょうか？私にはそうは思えません。おそらく多くのお子さんとは若干違っているシステムを持っている、そのような特徴・特性を持っているということだけなのではないでしょうか。もちろんすっきりと判断できることばかりではなく、より軽度の方が多数おられます。これらは病氣とは思いませんが、不適切な扱いの中で、多くのお子さんとの隔たり、問題性や二次障害（反抗挑戦的態度など）を結果として持つてしまう危険性を、大人側は認識すべきです。

ADHD、自閉症スペクトラム  
への援助の視点

ADHDの人には環境を適切に整えておく必要があります。周囲の刺激にすぐ反応してしまうといった利他的生き方をしている幼児から学童

